

四月のテーマ

夫婦道

# 倦怠期

丸山竹秋

毎月第一週に配信する「今週の倫理」では、倫理研究所会長・丸山竹秋（一九二一—一九九九）のこトバを掲載します。



え・たむらかずみ

**夫**

婦のあいだに、倦怠期がくるというのは、愛情のある証拠といえましょう。なぜならば、倦怠期すなわち飽きがくるということは、以前は愛情がこまやかだったけれども、今はうんざりして、それほどでもなくなっている、ということにほかならないからであります。

いいかたをかえると、仲がよいから倦（あ）きがきているのです。すなわち、夫婦の倦怠期とは、愛情の沈潜期（ちんせんき）であります。

愛の休憩期といってもよいでしょう。和合の状態が一段落して、つぎの前進への準備にとりかかっている時期である、ともいえるのです。

日本をはなれて、しばらく外国に行っていると、日本のよさがつくづくと思はれます。日本のよさの中には、やはりこんでいると、日本のよさがわからなくなってきました。これも一種の倦怠期に陥っていることになりました。太陽の恩恵などにいたっては、人間はほとんど倦怠期づくめで、無自覚のまま、すごすことが多いといってもよいでしょう。

倦怠期にある夫婦は、おたがいの

良さの中に酔いしれて、意識不明になりかかっているのですから、思いきって、つめたい水でも、かぶってみたらよいのです。つめたい水をかぶれとは、「目をさまし、心の窓をひらいて、相手を客観視せよ」というのです。

いつも聞いている相手の声……それは、いつも変わらない音声のようでも、じつときいてみると、あるときは、調べ高く、あるときは、やさしさにあふれていることに、気づきます。ただ、いまの自分がそれに気がつかない、発見できない、というだけにすぎません。

倦怠期とは、相手のすばらしさを、さらにさらに、たくさん掘りだすべき時期ということになります。たんなる倦怠期として終わらせるか、あるいは、自分が芸術家のようになると、相手の中によりすばらしいところを見つけたか、いずれも、あなたの自由であります。それはちょうど、苦難をたんなる苦難として終わらせるか、あるいは、苦難は幸福にいたる門であると自覚して、雄々しく踏みだすかどうか、あなたの

自由であるのと同じです。

自分の配偶者に、真の「美」を発見する、あるいは相手のすばらしさをみつける、ということは、自分がそれだけ芸術家になるということです。具体的には、あなたの配偶者を、あらためて、よく見直すということによって始まるのです。じつと見てみると、その糸口は見つかります。それを、ひとつひとつ、ほぐしてゆくのです。これを「客観する」というのです。

このようにして、ふたたび愛情の源泉にかえりつきますと、その内容は以前よりも、さらに高くもなり、深くもなり、豊かなものになってゆくのです。

最後に一言、あなたの配偶者は、あなたが現在知っているより以上のすばらしさ、よさをもっていることを、断言します。あなた自身も、今のあなたが自覚している以上に、よいところすばらしいところをもっているのです。人はその面では、だれでもお互いに認識不足者であるといつてよろしいであります。

『ここに倫理がある』より